

オペラ座の怪人

The Phantom of the Opera

鑑賞日：2016・6・13

制作 2004年 米・英 上映時間 143分
監督 ジョエル・シュマッカー
脚本 ジョエル・シュマッカー、アンドリュー・ロイド・ウェバー
原作 ガストン・ルルー
音楽 アンドリュー・ロイド・ウェバー
主演 ジェラルド・バトラー、エミー・ロッサム、パトリック・ウイルソン

(あらすじ)

1905年、パリ・オペラ座で劇場の備品を処分する公開オークションが開かれている。ラウル子爵は猿が楽器を奏でるオルゴールを購入する。競売人は次に、「オペラ座の怪人」による奇妙な出来事に関係した荒廃したシャンデリアを紹介し、灯りをともした時、まばゆい光が輝き、場面は1870年のオペラ座にさかのぼる。

グランドオペラ『ハンニバル』のリハーサル中、オペラ座の経営者が変わったことが紹介された時、大音響とともに背景が壊れる。人々は劇場の地下に住む怪人の仕業だと口々に噂をする。座付きのソプラノ歌手カルロッタは怒って歌手を降りたため、代役としてクリスティーヌ（エミー・ロッサム）が起用された。舞台でも彼女の美しい歌声は観衆を魅了し大成功を収めた。クリスティーヌはオペラ座の地下に住む怪人にレッスンを受けており、その成果が実を結んだのである。クリスティーヌは、怪人は亡き父が送ってくれた『音楽の天使』だと信じている。たまたま舞台を見ていた幼馴染みの貴族、ラウル（P・ウイルソン）が来て、彼女を食事に誘うが、それを見ていた怪人は嫉妬して彼女を地下の怪人の部屋に連れていく。クリスティーヌは怪人の顔を見たいと、そっと近づき怪人の面を外すとあまりにも醜いので目をそむける。怪人は激怒するが、それでもクリスティーヌに主役を演じさせるために劇場側にさまざまな要求を突き付ける……

(解説)

原作は、20世紀前期のフランスの推理作家ガストン・ルルーの怪奇小説「オペラ座の怪人」。1984年、ケン・ヒルの手により「オペラ座の怪人」が劇化され、それを見たアンドリュー・ロイド・ウェバーは直ちにミュージカル化を決意し、これまで一緒に作品を手掛けてきた名プロデューサー、キャメロン・マッキントッシュに電話連絡してミュージカル化が始まった。脚本、作曲はロイド・ウェバー。クリスティーヌにロイド・ウェバーと恋愛関係にあったサラ・ブライトマンを起用し、製作はスタートした。舞台は1986年にロンドンで開幕し、大ヒットする。英国での成功を経て、ブロードウェイに進出し、上演回数は1万回を超え、現在もロングラン中である。日本でも劇団四季が1988年に初演、これまでに世界27カ国(2013年現在)で上演され、総動員数は1億3千万人という。

映画化は初演後20年近くを経て、ロイド・ウェバー自身が製作を担当して実現した。舞台のイメージを守りながら映画ならではの場面構成。舞台の実写なのか、舞台から離れた映画独自の世界なのか、虚実さまざまな場面が続き観客を魅了する。

ロイド・ウェバー版の映画は「怪人」を単なるホラーとして捉えるのではなく人間の悲哀をモチーフにしており、そのロマンチックな要素が人気を呼んだと言われている。